

S59.12/9

84スポーツ余話

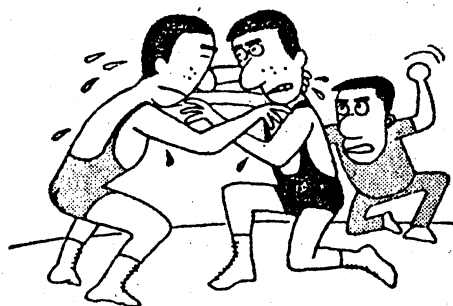
▶ 8

今年もまた、いろいろなスポーツの指導者に出会った。どちらかと書けば、その道では有名な人が多い。しかし、たとえ無名の指導者であっても、心ひかれる人たちは数多くいる。札幌市中央区伏見の東高等学校でレスリングを教えている鈴木重男先生(左)も、そんな一人である。

熱血先生

鈴木 重男

くれました。今、われわれの部があるのは、早坂先生や北海高のレスリング部のみなさんのおかげなんです。同じ純習社をこなしても、健常者比べると、進歩は遅い。小、中学校時代にあまりスポーツをしていないから、体力的にもある。だが、鈴木先生は情熱をもって教えることを投げ出さなかつた。「行け、行け」「根



行け、行け、そこだ

盲学校でレスリング指導

う。次の年は負けるまでの時間がかかり長くなる。そして、三年目には勝てる力をつけさせてやるんです。焦らすにやるつもりです」。鈴木先生が勝ち負けにこだわっているのは「この子たちは何かあった時に一併強くなればならぬんです。スポーツの勝つ味を知って、自信をつけさせてやりたいんです」という一心だ。

健常者ならば自分の好きなスポーツを選ぶことができる。格好のよさにあこがれてやることだってできる。しかし、目が不自由な子供たちの場合はそうはいかない。「うちの生徒たちは自分にはこれしかないと思っている。だから、練習の時もすぐくひたむきなんです。私はそのひたむきさが好きなんです」。鈴木先生の夢は、たった一人でもいいから全国大会への出場者を出すことだ。ボロボロになつたマットで練習に励む生徒たち。鈴木先生のささやかな夢が実現することを願わずにはいられない。

(松田 哲義記者)

自信と根性教える

南高、札幌大と、サッカーをやっていたので、最初のうちは学校の生徒たちにサッカーを教えていた。が「あくまでも勝つスポーツを指導する」という信念からみれば、ボールの行方を目で追わなければならないサッカーには無理があった。あれこれ考えた末、目の不自由なハンディを乗り越えやすいスポーツとしてレスリングを思いついた。

五十七年十月、学校にレスリング部を作った。とはいっても、最初のうちはルールも教え方もわからなかつた。毎日、北海高のレスリング部に通って合同練習をさせてもらった。「あのころ私の五人乗りの乗用車に生徒を詰め込んで、毎日北海高へ通いました。北海高の早坂先生が快く応じて

性を伸ばせ」と、励ましながら、戦で行われた初日の団体戦では、生徒を引張ってきた。昨年六〇勝三敗と、一つも勝てなかつた。二日目、個人戦で、教に出た。た出崎博行君が一回戦に勝つた。「涙が出るほどうれしかった。選手選では三人の生徒が優勝し、一年生に二人いる。「全盲の子にも勝たせてやりたい。最初の年は15秒か20秒で負けてしま